

3 おべんとりょうてにかえりみち

おべんとりょうてにかえりみち

「それじゃわたし、お弁当買ってくるわね」

合宿の帰り、迷子になっちゃったヒメちゃんと相楽くんを救いだして、電車に乗って。

落ち着いたところで、わたしは席から立ち上がったの。

「ん。お願い、ゆうゆう♡」

めぐみちゃんが軽く言ってくれたから、

「というわけで、いおなちゃん？」

わたしはまっすぐ手を出したのだけど、その前でおなちゃんが、半分立ち上がりそうになっちゃった。

「ちょ、ちょっとめぐみ、ゆうこだけで5人分のお弁当買いに行かせる気？ 私もいっしょ。」

ポシエツトからぐらさんまで出てきて、わたしたちを見上げてる。ん〜

「だ〜いじよぶ 大森こはんの目利きに、まっかせ

なさい」

「そうそう。ゆうゆうは、お弁当のプロだもん。こは、まかせようよ」

わたしが胸を叩いて言ったら、めぐみちゃんも応えてくれた。さて、どうかな？

「ん。そうね。駅弁はお得が一番、ってわけじゃないし。おねがい、ゆうこ」

あは、ぐらさんがポシエツトから、ちょっとキラキラしたおサイフを出してくれたわ。神さまのおサイフ、いまはいおなちゃんが管理してるのよね。

「はい、おサイフたしかにお預かりしました〜」

受け取ったおサイフを両手に乗せてお辞儀したら、いおなちゃんがぐすつと笑った。うん

ちゃんと考えて、信じて、笑ってくれる、わたしの友だちたち。

そんなやりとりのむこうで、ヒメちゃんだけ黙ってる姿が、わたしの中でちよつと引っかかってたの。

「しあわせごはんで、きよおも、ハピネえスう〜」
ちっちゃく歌いながら、わたしはお弁当売ってた
お兄さんを探して歩いてた。

電車に乗ったときに、ちょうど奥の方に行くところ
だったんだけど、姿が見えないな。おなかはもう
空いてるんだけど。

それにしても、なに買おうかな

「決め手はごはん。これはゆずれないわ」

サンドイッチとかバーガーみたいのとか、駅弁もい
るあるけれど、やっぱりごはんがなくちゃ、ね。
冷めちゃって、むにゅっとしてるけど、それもまたお
いしいのよねえ。ちよっと残したところに、あつた
かいお茶そそいだりして

「ん〜っ♡」

「コンッ！」

「痛っっ！！」

いたたたた　目を開けたら前に鉄のとびら。はあ、
いけないいけない。わたしまた、想像だけでちよ
とどっか行っちゃってみたい。

「よい、っしょと」

電車のつなぎ目の重いとびらを、ガラガラ言わせ
ながら開けたむこうに、つぎの電車。そこにはお弁
当のお兄さんが　いなかった。

あら〜？

「来るの遅かったかな？」

しかたないなあ。それじゃもうちよっと、おなかす
かせますか。

「ああ〜ごはんは、おいしいいな」

またちっちゃく歌ったけど、おなかすいたまま、て
くてく歩いてると、なんだかいろいろ考えちゃうな。
「相楽くんの顔、赤くなること多くなったよねえ」

この合宿の間にも、なーんか意識しちゃってる感じ、何回もあつたなあ。

めぐみちゃんも、ちよつとぼつとしてるときあるしー相手は、いまは違つかもしれないけどーこれは、いよいよ、かな？

「うんうん、青春だねえ」

ふふ。言ってから笑っちゃった。みんなの前で言ったら、自分はどうなの、とか言われそうだよな。

もちろん、わたしも関係ない、ってまでは言わないけど。

「幼なじみは一緒なのに、なんで今でも『相楽くん』と『大森』なのか。なーんて」

ちっちゃく言った自分の言葉に、自然と笑いが苦くなっちゃった。

忘れちゃってるのが、忘れたことにしてくれてるのか、そこまでもう聞かない。でも、でもね、

「そこがまた、かわいいななあ、めぐみちゃん
は」

えいつ、っと一歩踏み出して、足が地面につく感じを確かめ

ゴンッ！

「^{いた}痛たっつー！」

あいつなあ。足の前に、頭がぶつかっちゃったわ。目を開けたらやっぱりまた、鉄のとびら。あーあ。

気をつけましようねえ、って自分に言い聞かせながら、わたしは重いとびらをよいしょ、っと開けたけど、口は勝手に違う言葉をつむいだの。

『もう、そう言えるから。いいんだ、わたしは』
声は、出てなかったけど。

「ふう。つと!?」

重たいとびらが閉まる音と一緒に出てきた息に、わたし、思わず頭を振ったわ。

あはは、ちがうちがう。自分にためいきなんて、もう、つくわけないものね。

これは　そつ。すつこくわかりやすいめぐみちゃんと相楽くんなのに、気づいてくれないヒメちゃんたちに対して、よ。

「ドンカン　じゃあ、ないわよね」

うん。むしろ逆。ヒメちゃんは、とっても感じてくれる子だもの。

「ヒメちゃんは、わたしを受けいれてくれたんだもんね。ちゃん」と

自分でもわかっているの。わたしを受けいれるハードルは、めぐみちゃんよりずっと高いんだ、つて。

でもわたし、まだ覚えてる。わたしに差し出してくれたヒメちゃんの手が、友だちになりたいって目いっぱい語っていたのを。わたしの歌で頭ぐるぐるになって、それでもちゃんと聴き続けてくれたのを。

「なのに、めぐみちゃんのことには気づかないのよねあれ？」

気づかないのは、めぐみちゃんと相楽くんのことだけ、かな？

「うーん　ちょっと待ってくださいよあ」

そういえば今日のヒメちゃん、なーんかへんだつたよねえ。相楽くんといっしょに迷っちゃったところまでは偶然としても、その後の雰囲気。なんだかちょっと、嫌いでもないのに、ちょっとだけ避けてる、って感じ。まさか

「わたし、めぐみちゃんと相楽くんは、暖かく見守りたい　なんて言っちゃったんだっけ。ヒメちゃんに」

それはもちろん、素直な気持ちを言っただけ、なんだけど。

「わたしたちが一緒にいなかったとき、それで何かあった、とか　？」

口に出してみたなら、本当に悪いこと言っちゃった気がして、背中の汗が冷たくなったわ。

突つつくわよね、ヒメちゃん。相楽くんの恥ずか

7 おべんとりょうてにかえりみち

しがりつぷり、よく知らないんだもの。まあ相楽くんだから、恥ずかしさマックスでも自爆はしないでるうけど。

けど。もし、そこから生まれちゃったとしたら——
本当に、心のなかは本当に本気だったら？

ピタツと足を止めたわたしの前に、また鉄のとびらがあった。今度はぶつかる前に止まれた——それは、いいんだけど。

とびらに手をかけて、力を込めて。重いとびらを開けながら、でもわたしの頭は違うこと考えてた。

「わたしにはふたりとも——ううん、相楽くん含めて三人とも、だいいじな友だちなんだけどな」

「あーあ。ちよつとでいいから、話せるひとが欲しいなあ」

重い音が背中で閉まるのを聞いてたら、勝手につばやきが漏れちゃった。

「この電車には当事者はつかり。直接関係ないのは、わたしと、いおなちゃん。」

いおなちゃん、か　こつ言ったらなんだけど、あんまり頼りにならなさそうなのよね。

「ちよあつと、慣れてないっばい、けど」

『となりのクラスの氷川さん』の頃は、ちよつと、ううんって思ってたのよ。でもいまは、しかたないってわかるわ。お姉さんのこともあって、そんなひま、なかったんだよね。

となると、結局わたしだけ、かあ。

「こはんでまあるくおさまったら、早いんだけどなあ」

端っこの電車の端っこの席に、大きな箱を膝ひざに置いた人がいた。お兄さんじゃなくて、おじいさんだったけど。

それじゃ、

「お弁当くださいーい」

ちよつと気分変えたくて、思いつき明るく言ってみた。けど あれ？こつちに向いたおじいさん、苦笑いしてるみたい。

「悪いねえ。なんかいつもより、お弁当売れちゃつてぞ」

売れちゃつて、って あら。

膝の上、大きな箱の中をよく見たら、中身はほとんどからっぽだった。

「お嬢ちゃんの声だったよね。ごはんの歌が聞こえてきたら、お客さんみんなが買ってくれてさ。あとこんだけしかないんだよ」

あらら。ちよつと前まで変身してたせいかなあ。ちよつちやな声のつもりだったのに、ついつい歌いすぎちゃうのよねえ。

箱の中身は、幕の内が2種類と、釜めし、か。みんなおんなじのにしようと思ってたんだけど まいっつか。そこまで食べるひともいないわ。

わたしが、ひとつで満足すれば、ね。

「それじゃ、ゼーンぶくださいな♡」

「うん、考えない考えない」

電車のつぎめごとに片手でバランスとりながら、重いとびらを開けて。両手に持ったお弁当を見ながら歩いてたら、心の中が少し軽くなってきたみたい。

ついつい、考え過ぎちゃうのよねえ、わたし。まだ、ほんとにヒメちゃんが——とは決まってるんだもの。早いよね、そんなこと考えるの　　と、ついついた。

「はあい、おまたせえー」

みんなの席の真ん中に入って、わたしは両手のお弁当を差し出したの。

「みんなー、好きなの選んでー」

言った瞬間に、幕の内がひとつ消えた。もちろん、

めぐみちゃんね。

わたしもちょっと狙ってるのはあるんだけど

ここは、友だち優先、よね 　　あら？

「どうしたの、ヒメちゃん。 　　おなか空いたのか

なあ〜？」

ちよつと、ぽーっとしてる 　　待たせすぎちゃった

かなあ？ それじゃ、わたしが選んじやおつか。ヒメ

ちゃんだったら、きつと味ごはんが好きだろうから

釜めし、かな 　　あ。

そうやって選んだ釜めし、渡そうとしたとき。わ

たしには見えちゃったんだ。

顔は前——相楽くんの方を向いたまま。赤いほっ

ぺに、なにか我慢するみたいにぎゅっ、とつぶった

瞳と顔

（本当に、心のなかは本当に本気だったら 　　）

あむっ！

とっさに、わたしはポケットのキャンディを口へ

放り込んだ。

「それじゃ、おサイフちょうだい。あと釜めしもね。

これ、あとで食器として使ってもおトクよ 　　あら、

どうしたの、ゆうこ？」

いおなちゃんから言われて、おもわずわたしは手

と首を振ったわ。

（どうしたの、か。どうしましょつかねえ 　　）

ガリッ

思わずこぼれそうになった言葉を、わたしはキャン

ディと一緒にかみくだいた。

いいえ。

決まってるじゃない。もし本気なら——わたしに

は三人とも、だいたいな友だちなんだもの！

「よあし、食べますよあっ！」

「大森、またなんか八丈迷惑なこと考えてねえか、お

まえ」

前の席からぼそつと声が聞こえてきた気がしたけど、気にしませんよ。ふふ。

—おしまい—